



夏の終わりの日、姉の明代が消えた。夜の闇に吸い込まれるように。部屋はあけ放たれ静まり返っていた。いつまで待っても、明かりが灯ることはなかった。次の日も。

物音に目を覚ました。時計を見ると深夜二時過ぎだった。首元が汗でびしょりだった。汗を拭いながらドアを開け、右側の姉ちゃんの部屋を覗くがドアは開いたままだった。音を立てないように一階に降りていくと親父が電話で話していた。台所のテーブルに座っていたババアに誰と話してるのと聞くと君子さんだと言った。夜中に何事だろう。

「姉ちゃんが見つかったの？」

「まだよ。二階に上がってなさい」ババアは眼鏡を拭きながら答えた。

こんな時だけ親ぶりやがって。俺はトイレに行ってから冷蔵庫から麦茶を取り出し、コップに注ぎ一杯のみ干してから、階段を上がった。姉ちゃんは無事なのだろうか。部屋はむっとしてまた汗が吹き出た。俺はしばらく扇風機に当たりながらベッドの上で呆然としていた。不安が胃をぎゅっと収縮させ締め付けた。

気がつくとも熱風とともに日がさしていた。汗を拭って上半身を起こした。玄関が騒々しい。だれか客が来ているようだ。階段を下りていくと玄関にいたのは警察だった。親父とババアは事情を聞かれていた。

「捜索願いを出しましたか？」

「もう一日待って帰ってこなかったら出そうと思っていました」

俺は怖くなって、トイレをすませ、すぐ二階に上がった。居間にも二階の部屋にも姉ちゃんがいる様子はない。落ち着かずにCDをかけた。しばらくして音楽の下からババアが叫んだ。

「泰くん、お母さんたちちょっと警察に行ってくるから留守番お願いね」

勝手にしろよ。聞こえていたけど返事をしなかった。窓からそっと外を覗くとパトカーに二人が乗り込んでいた。

「加藤さん、すいませーん」誰かが下で呼んでいる。ドアを開け顔を出すと刑事だった。

「秋代さんの部屋を確認したいのですが」

俺は一瞬戸惑い、「右側の部屋です」と指差した。

刑事はミシッミシッと撓る階段を上ってきた。姉ちゃんの体温が今にも「おはよう」と出てきそう。部屋に入ると刑事は手袋をはめゴミ箱や机の引き出しを開けて調べ始めた。俺は廊下からその姿を眺めていた。

「あの、刑事さん」

「何か？」

「姉ちゃんは自殺したんじゃないんですか？」

刑事は動きを止め振り返って俺を見た。そしてすぐ目を逸らした。

「そうなんですか？」部屋に足を入れ、刑事の顔を覗き込んだ。顔がゴツゴツして剃った後からでも髭が濃いのが分かる。刑事なんて名前が家に入ってくることは怖いからゴツ男と呼ぶことにした。

「まだ確認中なので断定はできない」

ゴツ男はメモを取りながら言った。大柄で年は親父と同じくらいだ。

「学校は楽しいかい？」

俺は下を向いていた。

「君はいくつ？」

「十五歳です。学校には行ってないんです」俺は消え入りそうな声で答えた。「姉ちゃんも」

「ゴミ箱に薬の空があるけど、お姉さんが飲んでいたもの？」ゴツ男は飲み薬の透明な袋を手に持ちながら言った。手のひらに収まる袋の真ん中には俺たちを踏みつけるように「南病院西南病院西南」とローラースタンプの刻印が通っている。

「精神科の薬です。僕も飲まされています。姉は僕が学校から帰って来たらいませんでした」俺は泣きそうになった。ゴツ男は肩を叩いて「落ち着いて順番に話してくれるかい」と言った。「怖いんです。親父のことが……。何か言うと病院に連れていわれます。もしかしてあいつらが姉ちゃんを殺したんじゃないんですか？」

机の引き出しの裏に貼り付けてあったノートが見つかった。そこには殴り書きのような文字が躍っていた。

「一九九三年一月十四日。親と警察と西南病院に殺された。あの男たちは誰だ。警察と近所の内科医、長坂先生がやってきて鎮静剤を打って病院に監禁した。朝起きてすぐ、突然のことだった。どこへ行くのかも分からないまま車に押し込まれた。最初から大人たち四人で私を拉致する計画を立ててあった。もし本当に病気だというならなぜ、もっと早く専門医に見せなかったのか。私は何度も問い詰めたが、その問いに両親は答えない。親がしたことを隠すために仕込みの効く病院に放り込んだ。卑怯だ。隔離病棟ではでは大量の投薬、不衛生な所で一切の口答えを許さず、拷問のような日々だった。誰かに見舞いに来られては困るのだろう。親の保身のために薬漬けにされ人生を奪われた。大滝先生は何を言ってもあなたが悪いと全否定した。私は何も悪くない。退院後も強制的に薬を飲まされ病院と親に監視されている。母親は脳天気テレビを見て笑っている。今日、母親が病院で知り合った人の連絡先を捨ててしまった。私は暴れた。なぜ交友を切ろうとするのだ。助けて死にたい。私を取り巻く環境こそが狂気なのだ」

初めて知った事実だった。親は姉弟のことを互いに知らせないようにしていた。この家にあるのは家族の団欒ではなく、一人であるという孤独と恐怖。君子さんが、俺が学校に行っている間に姉ちゃんを病院にいれられたから良かったと真逆のことを言っていた。俺が家を出たのを確認して目撃証言を取られない時間帯を選んでわざと実行したんだ。完全犯罪だ。コンロの上で加熱される銀のポップコーンみたいに俺の頭も弾けて飛んでしまいそうだった。弾けとんだらババアみたいになれるのか？　そこはどんな世界なんだ。

ゴツ男は遺留品を持っていった。何かあったら連絡するようにと名刺を残していった。俺は呆然と姉ちゃんの部屋に立ち尽くしていた。俺が姉ちゃんを殺してしまった！　俺が姉ちゃんを殺してしまった！　あのときなぜ無理にでも止めなかったんだチクショウ。

親父たちが帰ってきたのは夕方だった。ババアは平然と飯を炊いて食べ始めた。テーブル越しに「どうして姉ちゃんは死んだんだ？　飯なんか食ってる場合か！　人殺し」と叫んだ。

いつだって友達の君子さんや親戚のおばさんと電話ばかりして、俺の話なんて一度だって聞いてくれたことがなかった。俺はおふくろの胸倉を掴んだが、とろんとした眼のまもうんともすんとも言わず茶碗を拾って飯を食い続けた。親父は眉間に皺を寄せ髪をいじっていた。俺は確信した。こいつらは狐の皮を被った鬼畜だ。

俺の家は横浜のはずれの高台にあった。いつでも隣には姉ちゃんがいる、何でも姉ちゃんのまねをした。

父親は飲料メーカーの工場でエンジニアとして働く。ラインに故障が発生したときは休みでも出勤することがあった。役職はなく、給料は三十万程度だった。テーブルにあった給料明細を見たんだ。若い頃から少し髪が薄かったが、結婚してさらに目立つようになってきた。ババアにちょっと薄いねといわれると神経質に気にした。親父には誰も友達がいない。家ではぶすつとした顔で新聞か本を読んでいる。誰がどんなことをやっても必ず文句を言った。一度だけという約束でババアが友達から金を借りた。親父はパンチパーマのカツラだけを愛し何百万もつぎ込んだ。約束を守らず隠し通帳まで作っていた。子供が生まれ家を建てたばかりで住宅ローンを抱え、ババアはそれが元でおかしくなった。新婚当初ババアの姉夫婦とひと悶着あって、姉の旦那がババアのことを気にかけ、トラブルになりかけた。

ババアは甲状腺の病気を発病し、内科に通院している。子供を生んでから体調を悪くし、電車にもバスにも乗れなくなった。でも親父も子供を憎んでいるからこじつけだと思う。元気でできると違う理由をつけて子供を憎んだのだろう。子供だけじゃない、濁った目で生存するありとあらゆるものに牙を向け憎んでいるんだ。ババアがヒステリーというより激高しだすとき、どこまでが病気で、どこまでが本人の性格なのか分からなくなる。ババアの病気のせいで家族で旅行に行ったことは一度もない。がさつで家事や料理のできない母親、笑っていたかと思うといきなり怒り出す父親、小さな家で諍い、学校で何かあっても誰も庇ってはくれなかった。

家族で海水浴に出かけることになっていたが前日俺と姉ちゃんは揃って風邪をひいてしまった。それでも親父は予定を強行し、救急車で運ばれ死にかけた。それでも親父は風邪をひいたお前らが悪いと切って捨てた。

数年前、音信不通になっていたババアの姉の純子おばさんが癌で余命幾許かになった時、ごめんねと言って電話をかけてきた。おばさんの体調が悪いことは以前から知らされていた。それでもあいつは顔を見にいかず、伯父さんが一緒に行こうと車で迎えに来ても車に乗れないと葬式にも行かなかった。車に乗れないわけじゃないか、病気を言い訳にしてるだけなんだ。内に秘めた嫉妬心は計り知れないものがあった。それを実の娘の姉ちゃんに向け続けた。学校で親父はパンチパーマのヤクザみたいだ、カツラだとかわかわれた。同級生が部屋に遊びに来たとき、ツラの入っているクローゼットを開けられそうになって隣の部屋にいた姉ちゃんに助けを求めたけど聞こえなかった。俺は泣きそうだった。それからカツラは一階の和室の部屋に移された。あの髪型では子供たちが可愛そうだと近所のおばさんが言ってもやめなかった。無精のババアの代わりに親父が学校の行事に参加しなければいけない時は地獄だった。早く一日が過ぎるように、それだけを願った。小さいときは慎ましい生活をしてきた。だけど一番幸せな時期だった。

平日は勉強しろとまくし立てる母親の声に耳を塞ぎ、休日には家の中が汚いと怒鳴る父親の声に怯えた。ガシャンガシャンと殺気立った物音の上がる居間から逃げ、二階に避難した。国語の読み取りが分からないので、教えてほしいと新聞を読んでいた親父に頼んだら自分でやれと投げ返された。親父は高校で成績が良かったそうで、それをそのまま俺たちに要求した。のんびりしてた親父の時代と今は違うじゃないか。自分だって親や兄弟に物事を教わって今があるんだろう。教えてもらっておいて子供には教えず、ただ結果だけを求めてくる。父親の背中を見て育つという言葉聞いて、心がひねくれそうになった。俺には模範にする背中なんかない。日常生活で親が何かを教えてくれたことなんてなかった。ババアは友人関係にも何かと口を挟み、友達が家に来て帰った後、あの子とつき合ってはいけないこの子とつき合ってはいけないと誰彼なく批判した。夏休みには毎年洗濯物を干すことを命じられた。夏休みくらいゆっくり寝ていたかった。せき立てられ休む暇がなかった。

小学校六年の冬の日だった。家に帰ると何だか家の中が騒然としている。玄関脇の和室で寝ていたババアに「何かあったの？」と尋ねると姉ちゃんが入院したという。そういえばこのところ姉ちゃんの生活は荒れていたようだ。そんなことを聞いても実感が無く、どこ吹く風だった。目の上のたんこぶがとれたようで、成績のいい姉が病気になったのはいい気分だった。人の不幸がどこか、楽しかった。自分のことだけで精一杯だった。春休みが終わる頃、姉ちゃんは家に帰ってきた。計算機で弾き出された概算のように崩壊する日常が動いていく。俺は動けないで家にいる姉ちゃんをじゃけに感じるようになっていった。姉ちゃんは家を飛び出して行って夜まで帰ってこないことがあった。俺も家にはいたくないと思った。

やがて中学校にあがり、今度は俺に集中打が浴びせられた。塾や水泳に通わされるようになった。空手をやっていた親父の影響か俺は運動が好きで、陸上部に入りたいと言ったけど「高校に行けなかったらどうするんだ！」とババアに怒鳴られ塾に通わされた。いいじゃないか、高校にいけなくても。別に死ぬわけじゃないんだ。人生にこうしなければいけないことなんてない。人が生きる道は一つじゃないんだ。

ある日の授業で担任の黒羽先生にからかわれ、学校からそのまま帰ってしまった。放課後、先生は家を探ねてきて俺の目が先生を見るまで帰らなかった。泰ばかり甘やかされていていい、私はそんな待遇を受けたことはないと言った。

姉ちゃんが薬の副作用で劇太りした。家族で車で公園にでかけたとき凄い勢いで苺を頬張るので、太っていて嫌だといったら姉ちゃんは泣き出した。ババアはあと何年で年金がもらえると指折り数えていた。俺たちはどうやって暮らしていけばいいんだよ、お前が将来を奪ったんじゃないかと戸詰め寄ったが、そうだよねというだけだった。親父は眉間に皺をよせて、立ちつくしていた。家族の心はバラバラで最悪なピクニックだった。

六月。俺は同級生に絡まれ、「放課後トイレで待ってるからな。逃げるなよ」と言われた。喧嘩をして帰ることが多くなった。言葉が突き刺さり眠れなくなくて深夜までがたがたと部屋にうずくまっていた。なぜ寄ってたかって俺の生活を壊そうとするのだ。そして長坂先生のところにつれていかれて薬を処方された。それを飲んでも眠れるようにならなかった。体育祭が近づいていた。どうしても出たかった。夏休みがあけても一向に眠れるようにならず、学校にもいけな

なくなった。毎日ババアに説得され、姉ちゃんが入院していた西南病院につれて行くことになった。追い立てられる毎日、家にも学校にも居場所がなかった。母親が崩れ姉が崩れ俺も崩れる。九月、病院に行くとそのまま任意入院させられた。不衛生で暖房の利かない部屋。腐りかけの魚。耳がちぎれないパン。廊下に響く幻聴患者の叫び声。ゆっくり休むこともできない。そこはとも、中学生がいるような場所ではなかった。子供をこんなところに入れて平気でいられる親の気が知れなかった。これでもかと毎日毎日薬の山を口に運ばされた。三ヶ月して退院した俺は、あれだけ貶していた姉と同じように太っていた。この病院に入って驚いた。家族と精神科医が強制入院の必要があるといえ、物言わぬ屍にすることが可能なのだ。一番心許せるはずの親を信用できず、安らげるはずの家庭に怯える。元々なかった会話はさらになくなり、俺が切れても親父はとババアは押し黙っていた。なぜこんな目に合わねばならぬのだ、なぜ制服を着て道を歩く高校生のように学校にいけないのだ。俺は何かいけないことをしたか、贅沢を求めたか。

子供が病に倒れてから親父は一人ずつしか連れて歩かなくなった。学校に行っていた頃は友達と遊んでいたから、親とどこかへいくなんてこともなかったんだ。俺が車で帰ってくると、たまには私も出かけたという姉ちゃんを車に乗せを連れて出かけていった。車庫の下から家を見上げた。暗雲立ち込める要塞のような家。家に入ると待ち構えていたババアとバトルが始まった。二人が結託して逆らわないようにうまくコントロールされてる。何を賭け何と闘っているのか、なぜ闘わなければならないのか、もう分からなかった。

ババアに大学まで通わせるつもりだったのかと聞いたら、高校までのつもりだったと答えた。俺は何も聞いてない。

「みんなお前らが勝手に決めたことじゃないか！」

高校に行くだけなら塾なんかいなくても十分だったのに。最低ランクでも受かる高校はあった。一体何のために、あんなに詰め込んで勉強する必要があったんだ。子供は親の見栄に使う玩具じゃない。ババアは無言でラジオを聞いていた。都合の悪いことは見えない聞こえない答えない。なんて卑怯な奴だ。親の役目は、子供とは、家庭とは。一体何のための家族なんだ？ 頭がおかしくなりそうで、二階に駆け上がり布団に潜り込んで木の板を殴った。都合の悪いことは力づくで排除する奴らが憎い。悔しい、悔しい。がんじがらめの密室。

一階から昼ごはんよと呼ばれ、下に下りた。テーブルに出されていたポタージュをそそった。ポタージュは小麦粉が溶けきってなくてバターが浮いていた。いらいらしてまずいんだよ！と怒りをババアにぶつけた。ババアの財布から金を取り出し、一人で食べに出かけた。薬の副作用で喉が渇き、苛々する。もう薬は飲みたくなかった。俺は病気じゃない。

信仰の連絡係を親父がやることになったとき、ババアはあたしが人を紹介したのにと仕切りに悔しがって憎悪を親父に向けた。その係には紹介制のノルマがあった。お父さんは元気でいいというババアに、それじゃ俺はどうなるんだと猛反発した。子供の人生を奪っておいて自分だけ良い思いをしようなんてなんてお前は本当に母親なのか？ 息苦しい密室で延々と続く闘病生活。なぜそこまで信仰に拘るのか、幸せになるためとって、あっちへ布教、こっちへ布教しながら内を向けば子供の人生を貶めるのか分からなかった。順番が逆ではないか。信仰なんて気取った言葉を使わなくても、子供の俺にだって何を軸にして生きていくべきか分かるのに。

俺は親から離れ、次第に自分の部屋に引き困るようになっていった。ババアを攻め立てて同じ目に合わせてやろうと思った。俺は中学を卒業する年になっても学校に行きたいとは思わないだろう。姉ちゃんは学校に行きたいと願望を口にしたせいで通信制高校に入れられ、無理を強いられさらに体調を悪くした。お前がああ言った、だからお前が悪い。具合が良くなると、足を引っ張ってまた悪化させる。毎日が大騒動だった。でも俺が陸上部に入りたいと言ったことは叶えられなかったじゃないか。精神病院に入りたいなんて誰か言ったか？ 子供の発言の中から不幸のシナリオを選び、弄ぶ悪魔。

俺は昼間話す相手もいなくて二階の部屋で音楽を聴いたり、近所の店に出入りしおじさんと話していた。姉ちゃんは昼間ババアと一緒に和室にいた。どんなことをされたって、親といるしかない。そうなるように仕向けたんだ。いつも二人でいていいといたら、父親が休みのときはいつも二人で一緒じゃないかと言り返された。休日、親父は階段の下から飯を食いにくぞと声を張り上げ、玄関をドスンと出て行く音が聞こえ、俺はかけていった。どこに行くにも、親父は一緒に行こうよと猫なで声で俺をつき合わせた。

ダイエットのために夕方二人で始めたジョギングで姉ちゃんはみるみるやせていき、自殺未遂を繰り返した。ある日気づくとまた姉ちゃんがいなかった。西南病院へ入れられたのだ。俺たちは交互に入院している状態だった。神様はなぜ、こんな親に子供なんか与えるんだ！

不眠が募った俺は苛々して夜中に窓ガラスを殴って救急病院につれていかれ、手の甲を縫い、また入院させられた。奴らは俺が暴れるたび病院に隔離し、体力を奪い逆らう気持ちを削いでいった。この家に悪魔がいる。悪魔に抵抗して、目に見える形で不利な証拠を残してはいけない。だれか、だれかこの地獄を見てくれ。救い上げてくれ。

退院後主治医の勧めで週一回、西南病院のデイケアに通うようになった。男子は人数が多くてすぐ友達ができた。一つ年上の神吉さんは不登校だけど自分で勉強をしてきちんと字も書ける。俺も負けるほどだった。誰かが手術をすると聞けば、あの人は癌で入院するんだってと笑いながら喋った。みんな、みんな俺より不幸になればいい。

ある日のデイケアの帰りに親父の車で、神吉さんを駅まで送った。神吉さんはお礼をいって車を降りたが、親父は何も言わなかった。何日か経ってうちに遊びに来たとき、お父さんって挨拶もしないんだねと言われた。神吉さんに親父の酷さを話すとどんな親でもいるだけましたと言われた。彼の家は離婚して、父親がいないのだ。どんな親でも、か。子供を殺す親でもいたほうがいいのか？ 逆らうこともできず殺されるのがいいのかと言いかけたが言葉を飲み込んだ。子供殺しの親なら、そんな親はいないほうがいいに決まっている。

神吉さんに抱きしめてほしいと頼んだけど断られた。俺は煙草をすい始め、物を買って気を紛らわすようになった。整髪剤が山のように増え、買いすぎだと怒鳴られた。じゃあ他に毎日何をしているというんだ。奴らの前で暴力を振るえばまた入院させられる。

姉ちゃんの拒食は進み衰弱は激しかった。

住宅ローンに子供二人の病院代、ババアの通院費、カツラ専門の美容院代、手入れ道具、車の維持費。このところババアは家事にもほとんど手をつけず出費は増えていく一方だった。親はそっぽを向き、現実から目を逸らし話し合うことができない。

休日、いつものように早くしろと怒鳴られながら親父と一緒に飯を食いにいくとき、いたたまれず車の中で尋ねた。

「どこからこんなにたくさん金が入ってくるんだ？ 収入は増えていないのになぜ生活が行き詰らないんだ」

親父は面玉をひんむいて威嚇した態度でアクセルを踏んだ。店で飯をたべているときも帰りもずっと無言のままだった。生活の実態がどこにあるのか分からない。俺は歪んだ般若の顔を横からじっと見ていた。

家庭は崩壊寸前だった。いつ誰が爆発し殺し合いに発展してもおかしくない。そんな中、退院したばかりの姉ちゃんが「二度も騙して入院させやがって、人生を返せ！」と親を問いつめ、家を飛び出して行ってしまったのだ。

警察が家に来てから二日後。姉ちゃんは近くの橋から飛び降り自殺を凶ったとババアから聞いた。親父は仕事にでかけ、和室にはババアが寝転がってラジオを聴いている。執拗なまでの呑気さに頭を踏みつけてやりたい衝動に駆られた。居間では蝉が網戸に張り付いて小さく二、三度泣いてからミーンと唸っている。姉ちゃんが叫んでいるように聞こえてたまらず外に出た。飯を食いにいき、夕方帰ってくるとだれもいなかった。一晩明けても帰ってこなかった。どうしていつも何も言わずに誰かがいなくなるんだ、この家は！俺は一人ぼつんと家に残された。あの日から俺には何もなくなってしまった。いや、最初から何もなかったんだ。騒々しくてうるさい家は一人だととてつもなく広く感じた。無性に寂しかった。姉ちゃん、どんな気持ちで橋か飛び降りたんだ？怖くなかったのか。

電話が鳴っている。出ると君子さんだった。声が上ずっているのが分かった。

「お父さんとお母さん捕まったんだって？」

「うん、そうみたいだね」

「明代ちゃんが自殺したこととお母さんは関係ないのにね」

なぜうちのことを何でも嗅ぎ付けて知っているんだろう。ババアが連絡したのか、新聞にでも載ったのかもしれない。この家の問題の一つはババアの会社員時代からの友人で隣のK市に住む君子だった。ババアを電話口で叱咤しながら誘導して操っているのはこいつだ。まず家族より君子に話して相談してしまう。君子さんは息子が美容院で髪を切ってきて、前髪が長すぎると美容院に電話してもう一度切りに行かせるんだ。反抗的な長男より、自分に迎合する次男を可愛がっている。そういう話をよくババアから聞かされていた。自分の息子が一番でなければ気が済まない君子が、自分さえ良ければいいババアを後ろで操り、俺を潰すようにし向けたのではないかと思った。

「俺が入院したことも知ってたんだろ？」

「あたしが知るわけじゃない」

「どうして？ まず君子さんに連絡が行くし、俺たちのことを何だって把握していただろ」

「行き詰るようになってるのよ！」君子は吐き捨てるように言って電話を切った。なんていやなやつだ。むしゃくしゃしながら電話帳をひいて、横須賀に住む親父の姉の勝美おばさんに電話を

かけた。おばさんはおお、大変なことになったねと興奮気味に言った。親父から電話があったかと尋ねるとあったと答えた。

「直接殺したわけじゃないのに捕まるの？」

「警察が暴力を振るってないのに違法に取り抑えたらしいじゃない。それに今回のことがあるまで親戚一同にも一切秘密にしてたんだよ」

言われてみれば元々交流の少なかった親戚付き合いも、俺の具合が悪くなった頃から全く途絶えていた。このままでは施設に送られてしまう。叔母さんの家に住まわせてほしいと頼んだ。だが叔母さんは頑なに拒否し、うちにはそんなお金はないとそそくさと電話を切った。何でも金なんだな。子供の命よりツラが大事な親父と一緒に。他の親戚にも連絡して回ったが誰も預かってくれる人はいなかった。テレビでよく、親が死んで親戚のおばさんに育てられたと書いてあるのを見たことがあるが、俺には信じられない。ババアに貸しがある大森のおばさんは顔も見せなかった。助けてもらっておいて、恩人の子供がピンチの時放っては逃げる薄情者め。預かってくれる親戚もなく俺は施設に送られることになった。あいつらはいつだって自分と金のことしか考えてないんだ。

ポストの郵便物をとって戻ろうとしたとき、隣の家の田口さんに話してみようと思った。定年を迎えている田口さんは小さいときから可愛がってくれて、よく遊びに行った。インターホンを鳴らし出てきたおばさんに三年前のことを聞いた。

「本当に警察が来たんですか？」

「朝から騒々しくて何事かと思ったら、警察が明代ちゃんを担いで車に乗せたのよ。でもおかしなことに警官が乗ってきたはずのバイクもパトカーもどこにも止まってなかった。お母さんにお見舞いに行きたいって言っても家族以外は立ち入れないっていうの」

おばさんに施設に入ることを告げ、別れの挨拶をした。おばさんは顔をくしゃくしゃにして奥に引っ込み、今朝焼いたというクッキーをくれた。インコのムーちゃんが居間からクッキーと鳴いた。

姉ちゃんが自殺しなかったら、或いはただの自殺として片付けられていたら真相は発覚せずあいつらは完全犯罪を成し遂げていたんだ。どうしてもっと早く捜査してくれなかったんだ、そうすれば姉ちゃんは死なずに済んだのに。怒りをぶつける者は闇が奪った。俺は一度に家族三人をなくした。垣根をぐるっと回り、玄関でクッキーを握り締めながら泣いた。バイバイおばちゃん、バイバイムーちゃん。

月曜日の午後。インターホンが鳴り、出ると背広の男が立っていた。市の職員だった。俺はバックを取って玄関を出た。駅まで歩き職員と電車に乗り、施設に向かった。こんな時は誰の名前を呼んだらいいんだろう。家はどうなるのかと聞くと親が戻らなければ行政に処分されるという。職員に何かを話しかけられたけど上の空だった。電車を降りて静かな町を歩いた。先に進みたくないし、戻る場所もない。このまま時が止まればいい。信号の先に幼稚園みたいな建物が見えた。中に入るとむき出しのコンクリートが冷たく笑い、こっちへおいでと手招きする。事務所みたいなところでおばさんに引き渡され、職員は帰ろうとしていた。お願い、一人にしないで。職員は俺をなだめて帰っていった。見知らぬいくつもの目が俺を射抜く。怖くて心を閉ざし、毎

日泣いて暮らした。ここにいるのと親といるのとどっちが悲惨なんだろう。どっちにも光がない。

一ヶ月が経ち、諦め慣れようと勤めていた。ある日、施設に警察官と医者がやってきて俺を外に連れ出した。人手の少ない日曜、一瞬の出来事だった。外には数人が待機していて車に押し込まれた。その姿は確かに警官に見えた。だけど誰が一一〇番通報したのか分からない。道路を見渡すがパトカーもバイクもどこにも見えない。どうやってここまで来たんだろう。俺は車の中で必死に叫んだ。

「あんたは誰だ？ どの署の何ていう名前の警官だ？」

恰幅の良い制服男は無言で俺を取り押え、隣にいた男に注射を打たれた。姉ちゃん、こいつらは権力にかこつけて名前さえ名乗れないことを繰り返している。俺たちの口を塞ごうとしているんだ。行き着いた先はまたも西南病院だった。診察を受けることもなく、看護師に脇を抱えられ病棟につれていかれた。別館の地下の部屋で看護師に脅されながら薬漬けの日々を送った。枕の下にノートを挟み、日記をつづり始めた。三ヶ月して施設に戻った俺はノートを書き上げ、夜になってから施設の庭に埋めた。そのまま屋上にかけてあがり、天を仰いだ。

(了)

連鎖

<http://p.booklog.jp/book/43755>

著者：藤沢灯

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fmichi08/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43755>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43755>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.